厚生労働科学研究費（エイズ対策政策研究事業）

HIV 陽性者に対する精神・心理的支援のための身体科主治医と精神科専門職の連携体制構築に資する研究(総括)

研究代表者：池田　　学（大阪大学大学院医学系研究科　精神医学教室　教授）
研究分担者：白阪　琢磨（国立病院機構大阪医療センター　臨床研究センター長）
橋本　　衛（近畿大学医学部　精神神経科学教室　主任教授）
仲倉　高広（京都ノートルダム女子大学現代人間学部　講師）

1. 研究目的

HIV 感染症は、抗 HIV 薬の多剤併用療法によって慢性疾患と捉えられるまでに治療効果が得られるようになったが、一方で精神疾患や認知機能の低下、その他多様な心理的問題を有する HIV 陽性者が一定数いることが指摘されるようになった。このように多様化する HIV 陽性者の精神症状に対して、精神・心理的支援のための HIV 陽性者の身体科医師（かかりつけ医）と大学病院精神科、総合病院精神科、精神科病院、精神科診療所の精神科医（ならびに協働している臨床心理士／公認心理師・精神保健福祉士）が連携する診療体制の構築が望まれている。

われわれは、令和元年度からの厚生労働科学研究（研究代表者：白阪琢磨／山田富秋）の分担研究者として、「HIV 陽性者の精神疾患医療体制と連携体制の構築に関する研究」に取り組んできた。その結果、HIV 研修会への精神科医の参加率は依然として低いものの、研修への参加希望が多いことから、HIV 陽性者の精神科診療に必要な技術や連携に関する研修会の開催し、HIV 診療の啓発の場が必要であることが示唆された。また、HIV 陽性者の精神科診療はエイズ拠点病院に一極化していたが，うつ病や適応障害、不眠などの治療が多く，通常の精神科診療と同様に行えることから、HIV 陽性者の身体科医師と精神科医療機関の連携体制構築の重要性が示唆された。

そこで本研究では、HIV 陽性者の身体科主治医と精神科医療関係者相互の診療・相談体制の連携・構築を推進し、精神科医療の専門職（精神科医、臨床心理士/公認心理師、精神保健福祉士/社会福祉士、看護師/保健師など）がこの連携に積極的に関与できるようなマニュアルや研修教材を作成する。特に主治医と精神科医療者相互の診療体制の連携・構築を促進するための精神科医療専門職の研修体制、主治医が精神科医療者への共同診療を依頼するための精神症状の見立てやタイミングを見極めるための研修教材の開発を目指す。

研究1（池田）コメディカルを対象に、HIV に関する知識・理解を深める啓発研修を行うことで、HIV に対する抵抗感や不安感を軽減し、HIV 陽性者の支援を行うことが可能になるかを明らかにする。

研究2（白阪）HIV 陽性者の精神的心理的健康状態、精神科受診・カウンセリング利用のニーズと阻害要因を明らかにし、陽性者への援助を促進する方法を検討する。

研究3（橋本）ART の進歩により HIV 患者の生命予後は延長し、今後 HIV 陽性高齢者の増加が予想される。本研究では、HIV 陽性高齢者における HAND の実態を明らかにし、今後の高齢者対策に役立てる。

研究4（仲倉）HIV 医療と精神科医療の連携に関与する看護・福祉・心理職の技術共有とネットワークを構築する。

2. 研究方法

研究1(池田)2021 年度に実施した精神科医の HIV 研修会を元に 2022 年12月18日にコメディカルを対象とした研修会を実施し、研修会前後でアンケート調査を実施する。
(倫理面への配慮)大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を得た。

研究2(白阪)大阪医療センター外来通院中の陽性者 500名を対象に、精神症状、受診行動、相談行動などに関して無記名・自記式の調査を行う。
(倫理面への配慮)大阪医療センターの倫理委員会に相当する受託研究審査委員会の承認を得た。

研究3(橋本)国立病院機構大阪医療センターに通院中の 60 歳以上の HIV 陽性患者 100 名(予定人数)を対象に、心理検査、頭部 MRI 検査を実施し、認知機能低下・精神症状を認める患者の割合、認知機能の障害プロフィールを明らかにする。
(倫理面への配慮)本研究は、「ヘルシンキ宣言」に基づく倫理的原則を遵守し、研究実施計画書、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を遵守して実施する。

研究4(仲倉)ブロック拠点病院勤務 MSW を対象にHIV 医療と精神科医療の連携事例に関与した看護・福祉・心理職の機能と困難さについて分析する。

3. 予想される成果

HIV 陽性者の多様な精神疾患や認知機能障害に対して、見立てや紹介のタイミングを習得することにより、ニーズに合わせた身体科医師から精神科医療機関への適時適切なリエゾン診療体制のモデルを構築でき、今後全国に波及効果が期待できる。また、HIV 感染症専門医や HIV 陽性者を診療する身体科医師と精神科専門職の連携も容易になり、総合診療的な受け皿が構築できる。また、連携に携わる心理士、ソーシャルワーカー、看護師のための教育資材を開発することができる。

研究1(池田)HIV 陽性者の多様な精神疾患に対して、ニーズに合わせた身体科(かかりつけ医)ー 精神科医療機関による診療体制のモデルを構築でき、今後全国に波及効果が期待できる。

研究2(白阪)HIV 陽性者の精神科受診やカウンセリング利用のニーズと阻害要因を明らかにすることで、受診・利用促進のための介入方法の検討が可能となり、その知見を全国の HIV 診療拠点病院等に還元することができると予想される。

研究3(橋本)60 歳以上の HIV 陽性者の認知機能低下・精神症状を認める患者の割合、認知機能の障害プロフィールを明らかにすることで、本邦の実態に応じた教育用の教材作成へとつながる。

研究4(仲倉)連携上の困難さ・対処を明確にでき、全国の MSW で共有することで、均てん化が図れる。カウンセリングの効果評価の視点を明確にでき、介入方法に資することができる。

4. 研究結果

研究1(池田)研修会前は21名、研修会後は 17 名からアンケートの協力が得られた。専門資格は公認心理師、臨床心理士、社会福祉士、精神保健福祉士、保健師、作業療法士等多職種の参加が得られた。研修会後に HIV への不安や抵抗感が軽減したと 70.6%が回答し、知識を得たことで対応ができると 94.1%が回答した。

研究2(白阪)対象者 245 名(49%)中の精神科未受診者のうち、自他が受診の必要性を認識している 25 名(14.3%)における未受診の理由は、「精神科医に HIV 感染症についての偏見があるのではないかと思う」などであった。

研究3(橋本)HAND に関する文献レビューで得られた知見を基に「高齢 HIV 陽性患者の認知機能障害の実態調査」の研究計画書を作成した。現在調査研究開始に向けて、大阪医療センタースタッフと実施手順について調整中である。

研究4(仲倉)同意が得られたブロック拠点病

院勤務 MSW と HIV 医療から精神科医療へ連携する際のチェック票を作成した。

5. 考察

研究1(池田)

精神科医の調査結果と同様にコメディカルにおいても、研修会で知識を得ることで HIV 陽性者への対応の不安や抵抗感が低下することが示唆された。研修会で得たものは、医師の場合は感染対策や薬物治療等であったが、コメディカルは心理面や直接的な支援方法についてという回答が多かった。

研究2(白阪)精神科受診の阻害要因として、精神科医による偏見に対する恐れの存在が推察された。研修等によって精神科医の受け入れを促進し、HIV 診療施設との連携を深める必要がある。

研究3(橋本)倫理委員会の承認後、速やかに調査開始予定である。

研究4(仲倉) 精神科医療機関との連携を行う MSW が HIV 医療から精神科医療へ連携する際のチェック票を作成し、今後、MSW を対象とした模擬事例によるロールプレイイングと、連携のための技術習得・研修を行い、研修前後の MSW の意識調査を実施する予定である。

6. 自己評価

1) 達成度について

研究1(池田)コメディカルへの研修会も好評であった. ほぼ予定通りに進行している。

研究2(白阪)概ね順調であり、より詳細な分析を予定している。

研究3(橋本)本年度後半には調査開始予定であったが、現時点で調査を開始できておらず、当初の目標より進行が遅れている。

研究4(仲倉)予定通り進行中である。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

研究1(池田)精神科受診が必要なHIV陽性者がより安心して受診できる体制づくりに向けて、HIV に関する正しい知識の普及は精神科医とHIV陽性患者双方の抵抗感を下げることにつなげられると考える。

研究2(白阪)HIV 陽性者の精神科受診およびカウンセリング利用の阻害要因に関するこの規模の調査は、本邦では実施されておらず、学術的・社会的意義を有すると考えられる。

研究3(橋本)高齢HIV患者の認知機能が明らかになることにより、今後増加する高齢HIV患者のマネジメント方法の改善に寄与すると考えられる。

研究4(仲倉)HIV 医療と精神科医療の連携に関わる看護・福祉・心理職の技術の均てん化に寄与し、連携促進が期待できる。連携時の困難さを明確化し、連携の課題と対処法の明確化が期待できる。

3) 今後の展望について

研究1(池田)精神科医向け・コメディカル向けの HIV ハンドブックの作成を行う。

研究2(白阪)今後詳細な分析を行い、得られた知見を次年度作成のハンドブックに反映し、広く HIV 臨床および精神科臨床の現場に還元する。

研究3(橋本)調査結果を学会発表、論文化するとともに、本研究成果を若年性認知症コーディネーターや認知症専門医の啓発資材開発や研修会の企画・実施に役立てる。

研究4(仲倉)連携に関わる看護・福祉・心理職のマニュアル作成と研修、およびネットワークを構築する。

7. 結論

HIV 陽性者の多様な精神疾患や認知機能障害に対して、医師だけではなく多職種がより HIV の理解を深めるためには知識の普及は効果的である。また、HIV 陽性者が精神科による偏見や恐れがあることから、より安心して精神科を受診できるようにするためにも連携に携わる心理士、ソーシャルワーカー、看護師のための教育資材の開発が求められる。

8. 知的所有権の出願・取得状況(予定を含む)

なし。